

甌島

こうま



島の朝焼けと夕焼けの浜石。

「太一丸」は姉さんのご主人の船名なんですよ、と中野さん。

ふるさとの島へ
ただいま。
おかえりなさい。

地方ではお盆と正月はふるさと
の人口が倍になるとか。
中でも離島はそうで、「ドクタ
ー・コト」診療所」で有名になっ
た甌島も過疎化が悩みのタネ。
東京とふるさと鹿島町で半年ず
つ暮らし、作品制作に励む版画
家、中野洋一さんに「来やんせ！」
と誘われて、豊かな自然と温か
い人情にふれてきました。
感動や力をもらえるのがふるさ
とも。

なつかしいふるさと
父母よ、友よ、ありがとう



中野さん(64歳)はオランダ国際版画ビエ
ンナーレ展などに入選、海外の美術館に作
品が収蔵される芸術家。細長く連なる甌
島の中程の鹿島町に生まれ、中学を卒業
するまで島を出たことがなかったという。

鹿児島県薩摩川内市鹿島町は串木野港
からフェリーで約1時間半かかる。今も町
には中学校までしかない。その中野さんが

鹿島町。すぐ沖に三角に見える弁慶島。「子供時代あそこを
回って島から出て行くことが憧れだった。けど、島もよかところ！」





太陽の浜石はアクリル絵の具の版画。乾くと水に溶けず鮮やか。

還暦を迎えて「小学校の同窓会」をするこ
とになった。

島を出て以来、一度も会っていない友22
人が集まり、小学1年の時の女先生も
来られる。「歓迎の気持を伝えたい」

と思った中野さん。当日、フェリー入
港の栈橋に、描いた黄色い旗を持参

した。サオを手にはためかせ、端か
ら端へ走った。

「幸せの黄色いハンカチではないけど、喜
びをね、表現したくて」宴会では、昔、先
生が教えてくれた初めての踊り』となりの
みよちゃん』が心に浮かび、振り思い出
しながら踊った。先生が「そうそう、そん
なだったわねえ」と懐かしんでくれた。

「ただいま」と言えば「おかえりなさい」と
返ってくる温かさ。これがふるさとと中野
さんは言う。

人を圧倒する海、山、花や魚 自然の強い豊かな力

島に生まれ島に育った中野さん。南国
の強烈な生命の記憶に彩られた作品は、
木版画でも浜石でもおおらかな子ども時
代の真つ直ぐな力に溢れている。

今も町にはコンビニはないし、コーヒー店
もない。島の植物はすごい緑の力で繁茂し
て人を圧倒する。スパッと切り立った断崖、
車エビや鯛、ブリなどの魚や、咲き乱れる
花々がどーっと押し寄せて来るような迫
力が甕島の持ち味だ。

「ここに居ると人間は小さい。自然の大き
な力に比べて。夜になると月が冴え冴え
と見えて、人間は地球の一部で、小さな
存在なんだと分かります」

考えてみれば日本全体が島国なの
だし、各々の地方なりに厳しくも豊
かな自然が溢れている。帰省はふる
さとを見直す機会かもしれない。

折しも薩摩川内市役所鹿島支所は定住
促進の「余暇処事業」に取り組んでいた。



左から井上さんと山本さん。「島のテレビで紹介されて、小学生
に名前を呼ばれちゃって♪」と人気者の様子。

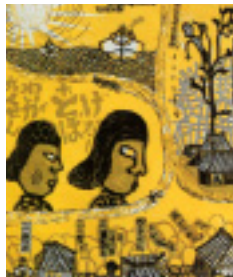
毎年15人ほどを、滞在費負担で全国から
鹿島町へ招待。漁村暮らし体験で島の良さ
を知ってもらおうと、漁師さんも民泊の女
性たちも挙って協力(梶原支所長さん談)。

参加者は東京や大阪、福岡等々。市に
研修に来ていた中国の方も。単身者より
ご夫婦が多く、「ここを新しい自分のふる
さとに」という目で見に来た人もいます。
イベントの最後が中野さんの版画。鹿島の
浜石に、型紙とアクリル絵の具で彩色し、
参加者が記念に持ち帰る趣向である。

鹿島町をめぐる潮は豊かな海を育んで
打ち寄せる。その波に洗われ、何万年も
かかっすべすべに削られた浜石。地球の
パワーが秘められた石からは豊かさが伝
わるのか、全員、制作に熱中した。

昨年は、大阪の岸和田市から参加した
山本さんがそのまま定住。千葉県からの
井上さんも鹿島にすっかりなじみ「ここが
気性に合う。気楽というか、もうすっかり
漁師かな！」と明るい笑顔。

ふるさとは、元気をもらう所。あなた
は最近、ふるさとに帰っていますか？



木版画。力強さと島育ちの
温かみに励まされる感じが。
(そのうち東京や地方の各
都市でも巡回展をする予定)